

# 『エミール』の幼児教育の感懐(一)

文學士 福島 政雄

(教育上の大著で、幼児教育者諸君に是非精讀と研究とをしなければならぬものは、ルソーの名著『エミール』である。邦譯(抄譯)も出來て居ることであるし、既に御精讀のことと信ずる。しかし、此の書は頭で讀むと共に胸で讀まなければ充分分らないものである。理解すると共に醉はなければ眞に讀んだといへない本である。繰りかへしく讀んで一句々々を味はへば味はふ程、深い眞味のある本である。本誌が福島文學士に乞ふて此の篇を續載せんとするのは、其の眞味に於てエミールを讀み、理解すると共に此の名著に醉はんが爲である。兒童に對する最も深い且つ溫みのある理解者であつた詩人にして教育論者なりしルソーの幼児教育觀は、こゝに此の華麗なる詩の如き言葉を以て語り出さるゝのである。諸君の精讀をすゝむ。編者)

(一)

涙の人生に自然の微笑を求めて叫べる人の聲を聞け。そこには言ひしらぬ心の響が百幾十年の昔から千載の人の心に永遠の教を宣る。あゝ自然の御手に横はる時すべては善であつて、人間の手にわたつてはすべてが墮落するとは何たる悲惨な意味深き永遠の教であるか。吾人は自然の御手に育てつくられた幼な子を愛らしい人生の花と護れよと授けられて居りながら、心なき吾人が一日々々の行は、言葉は、如何ばかり此の人生の花を損ふ

のであるか。返れよ返れよ——自然に。これこそはルソーが遠き昔より遠き行末かけて永遠に吾人の爲に宣る教の第一語である。

さはれ涙の人生に生れ出でたる愛らしき幼な子は如何にして自然の微笑を微笑むべき道にはすゝめ導かるゝであらうか。誰かその任にあたり誰か其最初の導きをするのであるか。『優しき胸に注意深き心を秘めたる母親よ。』滔々として流れ行く人の世の涙の道を遠くはなれて、生ひ立ちゆく若木の櫻の色香に塵をだにすえじと守らむ務こそは母

親としての務なれ。護れ、水を、げ、若木の姿みはてぬ間に。其木の實こそは御身等の喜びとはなるものぞ。先覺の聲は切々として吾人の胸に響く。

若木の花にもたとへらるゝ幼な子はたよりなきよるべき姿を以て此の世に生れる。空をかける鳥には羽毛があり、地をかける獸には毛皮があり、鳥は數月ならずして高く大突に飛び、獸は年を出でずして強き力を備ふるやうになる。然るに人間の子は如何であるか。人の子は裸形にして生れる。同じ日に生れた雛が青空に飛ぶ時、同じ日に生れた犬の子が兎を追うて野山をかける時、人間の子は静かに搖籃の中に搖られて手足はまだたよりなく口はまだ物言はず、柔かな腫に優しき心をあらはしつゝも無限の依頼を母親に寄せる。あゝいかにばかりたよりなきものであるか。

さりながら頼りなき人間の幼兒期に自然の深き心を汲みつゝ、ルーソーは教へる。人は幼な子の有様を悲しむ。併しながら人間が幼な子として生活

を始めなかつたならば、人類は既にはやく死滅してしまつたであらうといふことを了解しないこと。げに幼な子のたよりなきばかり教育上に意味深いことはないのである。吾人は弱々しく生み出される。故に吾人は力が必要である。吾人は何にも持たずに丸裸で生れて来る。故に吾人には助が必要である。吾人は發達して居ない能力を持つて生れて来る。故に理解力と判斷力とが必要である。すべて吾人が生れる時に持つて居ないで生長の後に必要なものは教育によつて吾人に授けられる。こそ教育が有効に行はれむ爲めにこそ幼な子の身心はか弱いものであることを思へ。教育の意義はここに大なる光を放つものではあるまいか。

然らば教育は人の心のまゝになるものであるかルーソーは否と答へる。教育は第一に自然によりて行はれ、第二に人間によつて行はれ、第三に事物によつて行はれるものと答へる。吾人の能力や吾人の身體の機管が内部から發達して来る

ことはこれ即ち自然の教育である。此の機管や能力に對して吾人がこれを使用する時に人間の教育は行はれる。此の外に吾人は種々の事物に對して經驗を積む。此の事物に對しての經驗こそは事物によつての教育の源泉であるのである。されば人間は此の世に生れ出でたる初から既に三人の教育者の支配をうけるのである。三人とは自然と人間と事物と即ちこれである。三人の教育者から受ける教育の結果は內的調和に至らなければならぬ。

此の三者の教育が同一點に向けられ、同一の目的に向つて努力する時に於いてはじめて人間身心の生命は十分なるハーモニーに達する。善良なる教育は此の如くにしてはじめて完成せらるゝものである。然るに此の三者のうち自然は人間の意志に支配せらるゝものではなく、事物は半ば人間の意志に支配せらるゝのみである。故に教育は決して人の心のまゝになるものではない。人間はどうして幼な子の周圍をとりかこむすべての勢力をその

意志の支配の下に齎すことが出來やうか。教育は術策ではない。教育の結果を齎らすに必要な様々の勢力は何人の支配の下にも存するものではないのであるから術策を弄せむとする教育は遂に失敗に終るべきものである。教育の目的は人間の捏造するものではなくて自然そのものである。されば幼な子は先づ自然そのものを目的として人生の春の旅路を導かれねばならぬとは脈々としてエミールの一篇の底に流るゝ血潮の流れである。

幼な子に於ける第一の自然はその感覺に存する人は感覺の能力を持つて此の世に生れ、生の初は吾人の周圍にある様々の事物より吾人にあたへらるゝ感覺より感覺へと彷徨する。吾人が事物に對してそれを意識するやうになるや否や、これを求め或はこれを避けやうとする傾向が吾人の心に起る。やがて吾人は吾人とその事物との間に調和が存するか否かを感じ分けるやうになる。更に進めば吾人はその事物によつて判斷力を與へらるゝや

うになる。斯かる間に所謂自然といふものが次第次第に吾人の心の中に形づくられる。

此の如く感覺の價値を認めたルソーは正しく幼な子の教育の第一程に對する識見を供へて居たのではないか。

併しながら此に於いて起り來る問題は自然と人間社會との交渉の問題である。自然が教育の目的である時に幼な子は自然の爲に教育せられるのであらうか、人間社會は幼な子にとつては没交渉であらうか。「自然の人は自己自身に完全なるものである。彼は數學上の單位である。彼は絶對の完全である。彼はたゞ彼自身及び彼と同等の者に對して關係を有するのみである。」といふ言葉のあとを辿るならば幼な子は遂に人間社會を離れねばならぬであらうか。ルソーはプラトンの教育論を捕へ來つて社會教育上最も完全具備した教育論であると賞讃しながらも、それは遂にユートピアの教育に過ぎぬと言つて居る。然らば社會と教育とは

遂に没交渉であらねばならぬであらうか。併し教育は人生の事である。エミールの幼な子も人生の爲に教育せられねばならぬ。あゝ然らば自然と人生とは如何にして教育上の繋合點を得るであらうか。それは何處に於いて得られるであらうか。幼な子を自然の微笑に導いてしかも人生の涙に處せしめる爲には幼な子は何處に於いて教へ導かるべきであらうか。

此に於いてかルソーは述べる。「殘る所は家庭の教育即ち自然の教育があるばかりである」と。ああ家庭！。ルソーはよくも家庭と述べた。家庭を措いて何處に自然と人生との交渉點を見出し得やうぞ。家庭は最も自然なる人生である。「人は幼な子の傾向を觀察し、その進歩を見てその生活の道程を跡づけねばならぬ。一言にしてつくせば人は自然の人を知らねばならぬ。」が、自然の人は幼な子に於いて最もよくあらはれ最もよく觀察せられるものであることを思へば、家庭に於いて幼な

子を導く人こそは實に人生の秘奥に分け入る鍵を握つて居るのではあるまいか。

あゝ天下の母親たる人々よ。心を静かにして先覺の聲にきく時いかに溢るゝ思が卿等の胸に湧くであらうか。幼な子の生れてより人となるまで如何ばかり小さき傷のあとをも小さき病のあとをも氣にとめて、生ひ立ちゆく小さき生命の小さき記録を深い母の愛の心に秘めて、その人となりし後までも尊き思に育兒の思ひ出を語るのは卿等の自然の情ではないか。あゝその自然の情よ、それこそは生ける心の力とはたらひて家庭に於ける幼な子の心の奥の林に分け入りそこに自然の一路を求めて美しき人生の春を受くたよりとなるものであるのは。如何なれば卿等はそれを心附もせずにかかゝと一日々々を送つて居るのであるか。幼な子の爲めに醒めよ、幼な子の爲に生きよ。先覺ルーソウの教は永遠の暗示を與ふるものではないか。自然と人生とを結ぶ家庭に育てられる幼な子は

人生の行路に進む。人生の行路の艱險の第一程に幼な子は先づ「人となる」ことを學ばねばならぬ。

流轉の人生には常住の樂もなく常住の運命もなく、運命は常に變轉して昨日の榮華は今日の夢となる。一生を通じて此の地位にあれかしと思をこめて幼な子を春風榮華の位に据えても誰か明日の秋風落葉を永遠に否定することが出來やうぞ。されば人の子は生活の地位に置かるゝよりも寧ろ先づ生活の力を與へられねばならぬ。「彼は生活する法を余から學ばねばならぬ。」「彼は先づ人間とならねばならぬ。」運命の變轉に對して常に悠々たる人間とならねばならぬのである。

「吾人の研究は人性の研究である。吾人の内で此人生の喜びと悲みとに最もよく堪へる事を知て居る其人こそは最もよく教育せられたる人である。されば眞の教育は教訓よりも寧ろ練習に存する。吾人は吾人の教育を吾人の生命の始まると共に始める。吾人の教育は吾人と共に始まる。吾人の最初

の教育者は吾人の乳母である。」かくして生活の力は最初より與へられるのである涙の人生に自然の微笑を與ふる教育は此如くにして始められる。

思へば涙の人生の變轉多き事よ。此流轉の人生に於て幼な子を教育するのに、恰も其幼な子は永久に其家の門から出る事がないかの如くに、恰も彼は常住に彼の家族に圍没せられて一生を送るもの、様に考へて居るのは何といふ間違つた考であらうか。かゝる教育は幼な子に運命の變轉に際して、より多く苦痛を受けよと宣言する悲慘なる教育ではないか。故に更に進んでルーソーは述べる。「人はその子供を大事にして置くことばかりを考へて居る。それでは不十分である。子供には自分が大人になつたら自分で自分を維持するやうに教へねばならぬ。運命の打撃に耐へて過多にも缺乏にも忍び、必要に際してはアイスランドの水原にでも燃ゆるやうなマルタの岩の上にも生活するやうにせねばならぬ。子供が死することのないや

うに守るよりも寧ろ生活する方法を教へねばならぬ。生活とは單に呼吸することではない。動作をせねばならぬ。吾人の機管をも吾人の感覺をも吾人の能力をも、換言すればすべて吾人の存在の感じを吾人に與へる吾人の部分を使用せねばならぬ。最も高齡に達したものが最も多く生活したものであるとは言はれぬ。彼の生活を最も多く感じた人こそは最も多く生活した人である。生れてから以來死せるに等しかつた人で百歳の齡を以て墓場に入つた人は多い。かゝる人は寧ろ青年時代に死んで、しかも少くとも其の死の來るまで「生きて居た」ならば一層宜かつたのである。」

是等の言は激越に過ぎるのであらうか。否々涙の人生に自然のはゝるみを齎さむとする人は斯かる一路を辿らねばならぬ。人生の爲めの試練を伴はざる家庭の教育は自然のはゝるみを齎す教育ではない。嚴冬の裡に春は存し春の裡に霜雪の功はあらはれる。子供を取り扱ふこと飾の人形の如く

温室の植物の如くする家庭は未だ自然のほゝるみを知らざる前に既に人生の涙に沈まねばならぬ。自然と人生とを美妙に結ぶ場所が家庭であり、家庭の花園の園守が母親である以上は、母の慈愛は霜を教へぬ温室の滋味ではなくて、霜を教へ雪を教へ霰を教へ翼を教へて而も永遠に温かき太陽の

温か味でなければならぬ。先覺ルーソーの言は此に響いて永遠の教を宣り、涙の人生はこゝに自然の微笑にはゝるむ。此の間に處する貴き父母の務は如何にルーソーによつて切々として説かれてあるか。そは稿を改めて我が共鳴の響きを傳へるやうにするであらう。

## 保育の目的及び躰方要旨

### 東京府女子師範學校附屬幼稚園

(東京府女子師範學校附屬幼稚園に於ては、さきに保育目的及幼児躰方要目につき編纂せられたが、實に一般の參考としても極めて有益なるものである。茲に同園主事日田權一氏の許可を得て、其の中、保育の目的及び躰方要目に關する部分を掲げる。)

## 保育の目的

る心情と習慣とを養ひ、以て家庭教育を補はんことを期せり隨て幼児保育上最も留意せる所は

第一 幼児の内部よりの自由の發展を誘導せ

んとすること。

本校幼稚園は單なる托兒所として幼児を收容するにあらず、積極的に幼児の内部よりの自由の發展を誘導して、心身を健全に發達せしめ、善良な

なり。内部よりの自由なる發展を誘導するとは幼